佳作（高学年の部）

# 祖母のオムレツ

埼玉県　越谷市立桜井南小学校　六年

嶋屋（しまや）　勝仁（かつひと）

「かっちゃんが、早く大きくなってくれたらうれしいな。」祖母の口ぐせだ。そんなに急がなくてもぼくはやがて大人になるし、体だって今よりずっと大きくなると思う。どうしてそんなことを言うのかと聞くと、

「お父さんはとても頼りになる人だけれど、これからどんどん年を取っていってしまうでしょう？　早くかっちゃんがお父さんのようにみんなを守れる人になったら、お父さんもお母さんも安心すると思うし、おばあちゃんもすごくうれしいよ。」

と言われた。

ぼくの家は毎年、父の運転で祖父のお墓参りに行く。途中で休憩をはさみながらとはいえ、片道約三時間を父一人で運転するのはとても大変そうだ。ぼくが小さい頃、父はぼくと一しょにサッカーやキャッチボールをして遊んでくれた。自転車の補助輪を外す練習をするときは、ぼくの後ろからずっと自転車を支えながら走ってくれた。最近は、昔より体力もなくなってきたような気がする。髪の毛もだいぶ白くなってきたし、一しょに遊ぶよりも姉やぼくが遊んでいるのをそばで見ていることが多くなった。

いきなり祖母に、

「どうしたの？」

と言われてハッとした。ぼくは、今考えていた父のことを説明した。

「それじゃあ、たくさん食べて、たくさん運動しないとね。もうすぐごはんだよ。」

テーブルに夕飯のおかずがならんだ。その中にオムレツがあった。祖母の得意料理で、中に具がたっぷり入っているのが特ちょうだ。また、何が入っているのかは絶対にひみつで、食べる時に外側の卵をやぶるまで分からない。祖母のオムレツは、食べる楽しさと中の具を当てる楽しさで楽しさ二倍なのだ。

「いただきます！」

あいさつと同時に、ケチャップをかけた。はしで卵をやぶってみると、この日はぼくの大好きなひき肉と玉ねぎとピーマンをいためたものが入っていた。気がついたら、いつもあまりご飯のおかわりをしないぼくが、三杯もご飯を食べていた。

「おばあちゃん、今日のオムレツ最高！」

ぼくがそう言うと、祖母はまだ食べていない自分のオムレツを半分、こっそりぼくにくれた。

ぼくは家族の中で一番年下で、ぼくに守ってほしい人なんてだれもいないと勝手に思っていた。けれども、祖母の言葉はぼくの成長を心から願ってくれる家族のありがたさを教えてくれて、胸が熱くなった。

「おばあちゃん、いつもありがとう。ぼく、早く大きくなるよ。」

と心の中でつぶやきながら、ぼくはご飯をかきこんだ。